【翻訳】ジョバンニ・ボテーロ『都市盛衰原因論』第二巻

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-06-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Ishiguro, Morihisa メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00054316

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

【翻訳】ジョバンニ・ボテーロ『都市盛衰原因論』第二巻

石黒盛久（訳）

はじめに

以下に訳出し注解を行ったのは、16 世紀後半活躍したイタリアの文筆家・聖職者ジョバンニ・ボテーロが 1588 年にその初版を刊行した著作、『都市盛衰原因論』（*Delle cause della grandezza della città*）の第二巻である。筆者は既に『世界史研究論叢』第七巻に同書の献辞と第一章の翻訳を公刊しているので、関心ある向きは合わせて参照されたい。今後残された第三巻についても翻訳・注解を施し、『都市盛衰原因論』全巻の内容を本邦に紹介したいと考えている。さてボテーロの名はまず以て本書『都市盛衰原因論』の翌年刊行されたその主著、『国家理性論』の著者として世に知られている（本書『都市盛衰原因論』は『国家理性論』刊行後、常に後者と併せて出版され続け、その補論と位置付けられるようになっていく）。マキアヴェッリにより提起された国家の行動原理の超倫理性の問題につき、〈国家理性〉なる名称をこれに付与することにより一方においてその存在を容認すると同時に、他方においてその適用に一定の基準や限界を設定することは、トリエント公会議後の硬直したカトリック教理にそのイデオロギー的基盤を据えつつ、近世初頭の西欧諸国間の熾烈な権力闘争に対峙しようとした南欧諸国家にとり切実なる政治的課題であった。

このような事由から〈国家理性〉をめぐる論争は、16 世紀後半南欧政治思想における流行の焦点となった。〈国家理性〉をその論題に掲げその明確な定義を示そうとした最初の著作、『国家理性論』の著者としてボテーロが多大な名声を博するに至ったこともまた、このような事情から理解できよう。だがボテーロのこの主著は、彼に続く 16 世紀南欧の多くの政論家たちから、その起筆に示された「国家理性とは一つの領国を定礎し、保持しまた拡張するため適した手段に関する教えのことに他ならない」という、〈国家理性〉に関する大まかな定義以外、実は〈国家理性〉につき何も詳細には論じていないとの、厳しい批評にされされることも少なくない作品である。実際この全十巻に及ぶ著作においてボテーロが、君主による国民の統御、国家間の外交、君主に求められる資質、国家の経済発展策、軍事制度論などを、それらの論題間の有機性を欠いたまま、並列的に取り上げている感は否めない。これら様々の論題全体を、一つに包み込む薄い皮膜こそが本書冒頭に掲げられた、〈国家理性〉に関する大まかな定義なのだと見ることもできる。

彼の政治思想上の競争者たるマキアヴェッリやボーダンの著作と比した場合、ボテーロの著作の欠点はまさに、この取り上げる論題間の有機性の欠如にあった。それは前二者が国家を、その存立の根底原理から検討に付し学理的に再構築しようとしたのに対して、後者がそれを既存の存在として最初から容認し、その円滑な運用のみに関心を集中させていたからである。デ・サンクティスの論評以来言われる処の、現状維持の思想家ボテーロにとり以後の議論に必要な出発点としてのその大まかな定義以外、〈国家理性〉に関する徹底的議論は必要なかったのである。他方ボテーロの議論の長所としてフィルポやシャボの如き古典的研究者は、その具体的事例に基づく各

論の分析の精妙さを指摘している。上述の如く『国家理性論』には内政論、外交論、君主論、経済論、地理論、軍事論などの各論が、豊富な実例の堆積から定式を帰納するという、当時の人文主義的政治論の常道に従い展開されているが、彼らによれば特に精彩を放つのが地理論と経済論の分野であるという。そしてこの経済論の分野のみを切り出し、より詳細に記述した著作こそ本書『都市盛衰原因論』だと彼らは評価する。

この書において彼は、その存在を無条件で肯定された国家の中枢としての、君主の座所である首都を、社会経済的に如何に繁栄させていくかという、より限定された具体的問題を取り上げる。俗に富国強兵というが、その中でも富国を重視した議論を展開しようとするのである。それは彼自身も自覚するように、「戦争の決め手は金ではなく精兵である」というマキアヴェッリの議論に対する、意図的反論である。そこには国家権力の獲得樹立を問題とするマキアヴェッリと、既存の国家権力による勢力の拡大を論じるボテーロの立ち位置の相違が露呈しているが、その背景として後者の議論の対象が、スペイン帝国の覇権体制内に置かれたイタリア諸領邦であったという条件を見逃してはなるまい。ともあれ議論の主題を自身の得意とする、具体的事例の分析に限定することに成功したボテーロは、些か冗漫の感のある『国家理性論』と比し、この小著において比較的首尾一貫した、骨格ある議論を展開することに成功したとシャボは言う。フィルポのように本書を以てボテーロの最高傑作と評する批評家も少なくない。

今回翻訳した第二章の具体的内容に触れれば、先に紹介した第一章が地味に豊かさや交通の利便性なかんずく水運の便など、都市の置かれている先天的条件—マキアヴェッリ的言葉を使えば〈運命〉の領域—との関連において都市の成長が論じられたのに対して、第二章に関して言えばその前半においては、自由で政治的抑圧の少ない社会環境の整備による外国からの移民の増大、宗教機関や教育機関の招致による文化の育成による都市の魅力の向上、免税や規制緩和によるさらには道路や港湾の整備によるヒトとモノの流通の活性化など、今日の政策経済学の萌芽となるような鋭い議論—同じくマキアヴェッリ的言葉を使えば〈人為〉の領域—が取り上げられるのに対して、後半においては前半に示された一般論がヨーロッパのみならず、中近東、インド果ては中国に関する豊富な情報を踏まえて実証されており、後年ものされた彼のいま一つの大著『世界の報告』(Relazioni Universali)の縮刷版を見る思いがする。こうした世界の情報の西欧に対する最大の発信源が、当時各地において活躍したイエズス会士たちの報告書であったことを考えれば、ボテーロの著述の背景に、彼が脱会者であったとはいえ元イエズス会員として活用し得た人脈の重要性にも着目する必要があろう。ともあれこうした壮大な記述において、彼の経済論は単に政策経済学であることを超え、世界各地の都市の繁栄を各地の地理的条件と人文的営為の絡み合いを通じて見事に解き明かしており、彼を世界最初の政治地理学者と呼ぶ向きも少なくないことも首肯されるのである。

なお翻訳稿の作成にあたっては G.Botero (a cura di L. Firpo), *Della Ragion di Stato con tre libri delle cause della grandezza delle città,* UTET, Torino, 1948 を底本とし、あわせて近年刊行された G.Botero (a cura di R. Descendre), *Delle cause delle cause della grandezza delle città*, Viella, Roma, 2016 及び G.Botero (transtaled by P.J.Waley, D.P.Waley and R.Peterson), *The*

Reason of State and the Greatness of Cities, Yale University Press, New Heaven, 1956, G.Botero (translated by G. Symcox), *On the Causes of the Greatness and Magnificience of Cities*, University of Tronto Press,Tronto-Buffalo-London,2012 を参照した。

翻訳と注解

第二巻

第一章　導入

ここまで我々は都市につき、その場所の便宜性や都市の肥沃さ、交通の容易さなどにつき論議を重ねてきた。続いて以下においては、元来どこにいようと意に介しないはずの人間が、別の場所以上にある場所において活動したり、また別の場所以上にある場所に物資が流入するようになる、その原因を考察することとしたい。そこで我々はまずこの問題について、ローマ人が行った独自の方法につき言及し、さらに彼らとほかの民族に共通の方法について取り上げよう。

第二章　ローマ人固有の方法

ローマ人により採用された第一の施策は、避難場所を提供し、外国人たちが自由にそこに逃げ込めるようにしたことである。というのもこの時代ローマ近隣の各地は僭主どもの虐政の下におかれ、その結果これらの地域は被追放者で満ちていたからである。そこでローマはその国内に享受される安全という恩恵を、こうした被追放者たちに提供することにより彼らを引き寄せ、自国の人口を増大させることに成功したのである[1]。郷里を捨て去ることを余儀なくされたり、祖国において平安な暮らしを享受できない人々が、事実ローマに多数到来したことからも、このことには疑う余地がない。そしてその結果この新参者たちには、人口を増殖させるのに必要な妻となる女性が不足してくるようになった。この問題を解消するためにローマの王ロムルスは、盛大なる祭りの開催を布告し、そこにやってきた近隣の娘たちの大半を誘拐してしまったのであった[2]。それゆえこのような［女の誘拐をしてのけるような］獰猛な連中から、ローマ人という、かくも強壮な民族が誕生したとしても、決して驚くべきことではないだろう。似たような方法ではあるが、もっと怠惰でかつまたいっそう忌まわしいやり方で、今日その人口を増大させたのがスイスのジュネーブである。というのも、この地はその正統な領主に反旗を翻したうえに、カトリック教会から換言すればイエスご自身から己を分離させ、離教者どもや自身の郷里で平和に暮らすことを望まぬ者どもの隠れ家をつくりあげているからだ。こうした輩はジュネーブの如き安全地帯に逃げ込み、そこを巣窟としているのである[3]。しばらく前には、ライン宮中伯家の一人カジミールもまた、ありとあらゆる種類の人々や、なんかずく異端者どもを受け入れることによって、その土地の人口をかなり増大させた[4]。そこには背教者の集団が存在し、あらゆる不信心者の氾濫がある。従って彼の領土はジュネーブの場合と同様、諸都市のうちでも不適切な場所として、我々に記憶されるべき場所と言えよう。トスカナ大公コジモ１世はポルト・フェライオの街の人

口を増加させるため、彼らに対して安全を保証してやることにより、多数の被追放者を招き寄せた[5]。その子たるフランチェスコ大公もピサやリヴォルノの人口を増大させるべく、父の施策を模倣している[6]。

だが先に我々が論じた如く、都市が繁華となり成長して行くにあたっては、暴力による強制や不可避性に頼ることだけでは不十分である。なぜなら強制の結果ある場所に滞在している人間たちは、そこにしっかり根付くことのない、砂の中に播かれた種のようなものにすぎない[7]。だがここではいったん避難場所という問題に立ち戻ることにしよう。よく制御された自由や外部に対する適切な開放性というものが、ある土地の人口増大に効果を発揮することは否定できない。まさにそのことゆえに自由な都市は通常、他の諸条件が同一である場合、諸君主や君主政体の下に支配されている都市に比べ、いっそう繁華となるものである[8]。

ローマが成長した第二の理由は、〈同盟市〉とも称されるローマに対し然るべき功績のあった地方に対して。ローマの市民権や公職選挙に関与させたことである。なぜならローマ市民の身分を保障され、それに伴う広範な特権を享受することの栄誉は、この共和国に対する依存や愛着そして奉仕のゆえに、この共和国において何がしかの官位を待望し得るあらゆる者たちを、この都市に集結せしめるのである。またこのような高い野心を持たない者たちであっても、少なくとも自身の投票権の行使により、己が親族や友人あるいは保護者でこのような野心を抱く者たちを支援すべく、この都市にやってくることになった。かくしてローマは彼らに付与された部分的あるいは一般的な市民権に由来する栄誉によって飾られた、高貴で有能な数限りない人々の流入により、ますます繁華富裕の地となったのである。ローマが成長した第三の理由とはこれを、ローマ人たちが人々の好奇心に対して継続的に提供した素材に求めることができよう。こうした素材とは彼らがローマにおいて行った、多数の驚くべき事柄のことに他ならない。即ち戦勝をおさめた将軍たちの凱旋式、驚異の的たる建造物、模擬海戦、剣闘士試合、珍奇な動物たちの狩猟、公的饗宴、アポリナーリ競技などの聖俗のさまざまの行事のことに他ならない[9]。これらの行事は言語を絶した豪奢な装飾等々をもって施行され、それを目当てに多数の物見高い人々がローマを訪れることとなった。そしてこのような魅惑的な行事が日毎に絶えることなく催されたため、ローマは外国人によって日々充満されたのである。

第三章　植民地について

植民地に関しては国家の人口増大政策上、これをどう評価するべきだろうか。植民地の存在はローマの発展に寄与したのか否か。筆者の考えによれば植民地の存在が、ローマの権勢の増大に寄与したことは疑う余地がない。だが植民地の存在が、ローマの人口の増大そのものに貢献したかどうかということに議論を限定した場合、従来から少なからず疑問が呈されてきた。だが私は人口の増大のためにも植民地の存在は、結局は大いに役立つものだと判断する。植民地に拠出すべき人数を捻出するため、都市の人口は増大するというよりむしろ減少してしまうのではないかと、少なからぬ読者が思われることであろう。だが実際に生じるのは反対の現象である。植物はそれが当初に播種された苗床ではよく成長せず、ましてや増殖することもない。それはむしろよ

り広闊な場所に移植される方がいっそうよく成長し、増殖の成果も上がるのだ。同様に人間というものも彼らが郷里とは異なる場所に派遣された場合と比較した時、彼が誕生した都市の閉域に取り残されたままでは、容易に成長増殖することができない。なぜなら時にペストやその他の伝染病が人口を激減させる要因となるし、飢饉やその他の原因による食料の欠乏が、人々に転居を余儀なくさせる場合もある。また時には外国との戦争が最も勇敢な人々をその犠牲とすることにより、この世から取り去ってしまうこともあれば、また他方では内戦が最も温和な人々をすら、この故郷から追い出してしまうことになる。また貧困やその他の生活上の困難が多くの人々に、結婚し子供をもうける気持ちや手段を失わせてしまうこともある。

さてこうした理由から、ローマに留まったままでは多くの人々が、死んでしまったり逃散を余儀なくされたり、また所帯を持つこともできず、その結果として子孫を欠くこととなってしまったことだろう。だが進んで他郷に赴くことにした結果、彼らはこうした危険を回避することができ、植民地において住居や地所に恵まれ、結婚し子をもうけることが叶ったのである。かくして植民に出た結果、彼らはその数を増大させ、10人が100人に増えることとなった。だがある者は言うであろう、だから何なのかと。植民地に送り出された連中は、彼らが郷里にいた際に国家が繁盛することに貢献しなかった連中であるに過ぎない。だとすれば彼らが郷外に出たときに、いったいどのようにして国家の繁盛に貢献しうるというのであろうか。それはなぜかというに第一に、諸植民地はその母市とさながら一体をなしているかの如き存在だからである。加えるに様々の手段を通じ補強されるべき、これらの植民地の母市に対する愛と依存のためである。さらに付け加えれば最も大きな力量を有する者や財にゆとりのある者を母市に引き寄せる、富と栄誉において一段の上昇を達成しようとする欲求と希望を忘れてはなるまい。これらを通じて母市は植民地の存在を媒介に、一段と人口多くまた経済的にも豊かになることができるに違いない。さながら幹から生える若木の如くアルバ・ロンガから分岐した30の植民地が、そしてまたローマが自身の外に作り出した多くの植民地が、この両者に壮大さや偉大さを与えたことを、いったい誰が否定できるだろうか。そしてまたリスボンから外に出て、そこに居住しそこを耕作するためにアゾレス諸島やヴェルデ岬、マデイラ諸島やその他の地に赴いたポルトガル人たちは、彼らがこれらの地に移住しなかった場合以上に、リスボンが都市として大をなすのに貢献してはいないだろうか。だが植民地がその母市を成長させる場合、その両者が互いに隣接していなければならないということは確かである。さもなければ相互間の距離のゆえに植民地の母市に対する愛は薄れ、お互いの交通は途絶してしまうことだろう。だからローマ人たちは600年にわたって、いかなる植民地をもイタリア外に創建することはなかった。彼らがイタリア外に最初に創建した植民地は、私が『国家理性論』第6巻の植民地の章に詳細に語ったように、カルタゴとナルボンヌである[10]。

ここまで語ってきた様々の方策こそが、ローマ人たちが彼らの都市に人々を引き寄せた方法に他ならない。続いて以下においてはローマ人と他の民族が共通して用いた、国家繁栄の手段について語ることとしよう。それを宗教から始めることは故なきことではない。なぜならこのことは、我々全ての活動の首位に立つものから議論を着手するということに他ならないからである。

第四章　宗教について

宗教あるいは神の崇拝は人間とその行為の大半がそれにかかわる、不可欠にして重要なものである。この点において他の都市に優って高い権威や名声を有する都市は、その繁栄という点においても多大な利点を有することとなる。プリニウスも記す通りエルサレムは東方第一の都市であった[11]。それはまさに宗教のおかげによるものであった。この都市はユダヤ王国第一の都市であるに劣らず、彼らの宗教の中心地でもあったのだ。そこには大祭司や祭司たちそしてまたレビ族の輩が居住していた。そこでは犠牲獣の燔祭やその他の奉献の行事がなされ、また神への崇敬の業が行われていた。年に三回、ユダヤ人民の大半がそこに参詣したのである[12]。それゆえフラウィウス・ヨセフスはティトゥス帝がこの都を包囲攻撃した時、市内に250万人の人間がいたと勘定していた[13]。このことは、この都の周囲が4マイルをわずかに超えるばかりに過ぎないことを考えれば、信じがたいこととは言わぬまでも、まことに驚くべきことであった。だがこれは実に、この都のことをよく知りかつまた虚言をなす理由をもたたない人のいう言葉なのである。イスラエル王に選出されたヤブロアムは、その臣民が宗教儀礼と犠牲の奉献の業なしに生きていくことはできないことをよく見抜いていた。とはいえ彼らが犠牲祭ゆえにエルサレムに参詣すれば、ユダ族を治めるダヴィデ王家に、彼らが再度帰順してしまうことは火を見るよりも明らかであった。そこで彼は即位する否や、従来の教えを排除して偶像崇拝を導入することにした[14]。彼は黄金の雄牛の像を二頭作らせ、それを彼の王国の両極に置いて人民に告げた。「あなたたちはもはやエルサレムに上る必要はない。見よ、イスラエルよ、これがあなたをエジプトから導き上ったあなたの神である」と[15]。宗教は都市を成長させ、領土を拡大するのに実に有効なものであり、美徳を涵養するものである。それゆえイスラエル王ヤブロアムはユダ王レハブアムとの対抗上、その臣下に対する宗教的魅力において引けを取らぬようにしなければならなかった。その結果ヤブロアムは邪悪なことながら、敬虔なる場所に偶像崇拝を導入することにしたのである。彼こそは国家の統治のために、法や神へのふさわしい崇敬を蹂躙し、剰えそのような実例を他の者たちに教示した最初の人物に他ならない。それは邪悪であるに劣らず実に愚かなことであった。思慮とか国家理性とかをもっぱらにするこうした輩は、臣民を君主の膝下にしっかりと抑え込んでおく手段の案出にあたり、人間的理性が神的理性に優るものだと考えているのである。蛆虫の如きものとしか思えぬ存在の思いつきを、至聖至大なる御神の好意に優るものだと思い込んでいるのである[16]。このような連中こそが王国の荒廃の、王国の疫病の、キリスト教世界の醜聞となる存在なのであり、普遍教会に対する—それ以上に御神に対する—共謀せる敵対者となる輩である。こうした連中は古の巨人どもに倣って、新しいバベルの塔を築こうとしているのだ。そしてこの仕業は彼らにとっても古人にとってと同様に、混乱と荒廃しかもたらすことはないだろう。「天に住まいする方は彼らを笑い者とし、主は彼らを嘲笑う」とある通りである[17]。君主たちよ！ファラオの顧問官たちにつき預言者イザヤが語る処を聞け。「ファラオの賢明なる顧問官たちは愚かな献言を行い、その民草のよりどころたるエジプトを誤らせる。主は彼らのただなかに眩暈の感情を吹き込んで、彼らのあらゆる業において彼らを混乱させる。あたかも泥酔し吐き気を催している者が、ふらふらと彷徨うように」[18]。もしこの個所に同意するなら私は、諸国の喪失とキリスト教諸侯

の失墜の大半は、彼らのこうした悪しき行いに由来するのだということを苦もなく示唆できる。そしてかかる悪しき行いにより我々は、《神》の守護や恩恵を失ってしまうに至るのである。その結果として我々はトルコ人やカルヴァン派の連中の手中に、我々に対する聖なる正義の武器や鞭を握らせてしまうことになるのだ[19]。だがここではかかる国家理性に従い《神》の法を蔑ろにする君主たちに対して、彼らの師であるヤロブアムを反面教師とすべきだと申し上げたい。即ち、この王の不敬虔な行為を模倣する君主たちに、その報いとして彼が如何なる結末を迎えたかを知り、神を恐れ畏むよう勧めたいのである[20]。《神》は彼の子ナダブを見捨てバシャをイスラエルの王に挙げ、後者は前者とその係累をことごとく殺害した。「彼はその一族の一人まで生かしておくことなく、それをことごとく絶ち尽くした」のであった[21]。だがここで我々は我々自身の主題に立ち戻ることとしよう。

宗教に関する様々の要素が、ある土地の人口の増加に大変大きな刺激となる。こうした要素とは即ち名高い聖遺物や聖なる奇跡に関する刮目すべき表徴、或いは教会の統治や管理にかかわる何らかの権威ある機関の存在に他ならない。イタリアのロレートやフランスのサン・ミッシェル、スペインのグァダルーペやモンセラート、コンポステラその他多くの場所が、このことを証していている。その寂寥さや荒涼さにもかかわらず、その峻険さや岩がちの地形にもかかわらず、まさに神に対する信心のゆえに(悪魔やその手先であるカルヴァン派の連中の妨害をものともせず)、また神に対する敬虔さのゆえに、遠くの国から無数の人々が日々こうした土地を訪れているのだ[22]。至高善たる《神》以上に人間の魂を引き寄せるに有効なものはないのであるから、このことは別に驚くほどのことではない。《神》は命あるもの命無きもの全てのものの究極の目的として、絶え間なく渇望され追求されるものである。軽量のものは高きところに浮上し、重量あるものは大地の中心へと沈降することによって、諸天は己が周囲を回転し、草花は花を咲かせ、木々は実を生らせ、獣は増殖し、人間は魂の満足や幸福を追いかけることによって、それぞれのやり方で《神》の存在を追い求めるのである。とはいえ神はその本質としては隠されたものであるから、感覚はかかる神の本質を照らし出すに至ることはないし、知性はかかる《神》の本質を受け止め切ることができない。だから個々の事物はかかる《神》がその力の何がしかの痕跡を残す場所へと、その臨在の何がしかの痕跡を示す場所へと己を向けることとなるのだ。そして通常かかる神の痕跡は山上とか砂漠において見出されてきたし、また今日も見出されている。そもそもローマ自体がその繁栄の源を、殉教者たちの流した血や聖人たちの聖遺物、場所の聖性や祝別された或いは聖なる事物の備えるその崇高なる権威に依存しているのではないのか。もしその場所が有するに至った聖性がそこに世界の果てからすら無数の人間を引き寄せることがなかったなら、もし使徒の聖座や天国の鍵の権能が、それを必要とする数限りない人々をそこに結集させることがなかったなら、ローマは砂漠あるいは人里離れた荒涼たる場所でしかなかったのではないか。

極めて重要な都市であるミラノは、それが偉大なボロメーオ枢機卿の敬虔さや宗教性を介して享受する光輝や成長を常に証し立てることだろう[23]。諸侯は北方の果てからすら彼を訪問すべくやってきたし、司教たちは彼らの案件をこの聖人に相談すべく四方から参集した。あらゆる民族に属する教区司祭や修道司祭たちがミラノを以て彼らの祖国と目した。彼らはこの聖なる方の居

処を以て彼らの精神的な港と、この方の寛大さを以て彼らの精神的な支えと、またその生涯を以て普遍教会的訓育の曇りなき鏡と目したのであった。彼が年ごとに司教区会議を如何ほどの荘厳さで開催したか、そしてまた三年ごとの教会管区会議を、如何ばかりの豪奢さをもって主催したかは、筆舌に尽くしがたいほどのものである。彼はどれほどの新しい教会を建造し、古い教会を修復したことであろうか。そしてまたどれほどの教会に装飾や化粧を施し、またどれほど多くの男女の修道会を設立したことであろうか。また彼が創設した多くの青年のための寄宿神学校や入門僧のための小神学校は、数え切れぬほどである。また彼が人々の多大な福利のために、どれほど多くの種類の学問所を創設したか、芸術や技芸をどれほど尊重したかもまた、計り知れぬほどのものである。これに加えてもし筆者が、この聖人が如何なる方法を介して、聖なる信仰を布教しつつ都市を拡張せしめ、ミラノの交通量を倍加させたかを語ろうとすれば、話は尽きることがないことであろう[24]。

第五章　大学について

その繁栄につき我々が論じている都市というものに人々、なかんずく若者を引き付けるのに有効な媒介の一つとして、大学の存在が挙げられる。というのも才華あり力量ある人物が何がしかの栄誉や名声を出世するには、二つの方途があるからである。それは即ち武器による途と書物による途とである。前者は戦場において槍や剣を通じて追求される。他方後者は学問所において書物と筆により追求されるのである。力量と学識を備えた意欲あふれる若人が、他の場所よりむしろ私たちに属する都市において目覚ましい進歩を遂げることができるよう、学問所や大学がそこ存在するということは、決して等閑にしてよいようなことではない。

それはなぜかといえば、人々は栄誉や利益を求めて大いに突き動かされるものであるからである。そして学問について言えば、ある学問は人間に確実な富をもたらし、またあるものは広範な栄誉をもたらすものなのである。こうした学問所や大学がその教育施設や教師の有する利便に加え、免税措置やその他の有用な特権を享受するならば学問所や大学は、人口増大上顕著な効果を発揮することだろう。もちろんこうした特権に伴って、あらゆる悪徳を招来するような免罪や目こぼしが学生たちに付与される訳ではない。こうした特権によってむしろ、学生たちがより快適に学業に励むことができるような、廉直な自由が提供されることになるからである。なぜならイタリアの各地の学問所にはびこっているような放縦ではなく、学者を満足と幸福により充足させるが如き、廉直な自由が付与されるべきであるということは、無論のことだからである（というのも研究ということは魂と肉体の多大なる努力や労苦を要するものであり、従って古代人たちは学問の女神のことをミネルヴァと呼んだのである[25]。なぜなら思索の労苦は精力と神経をすり減らすものだからであり、また辛苦に苛まれた肉体は魂をも苛むものだからに他ならない。この神経の衰弱から憂鬱症や悲哀の情が生じてしまうのである)。ところがこのイタリアの学問所ではペンが懐剣に、インク壺は火薬入れに早変わりし、議論は血なまぐさい諍いに、学舎は闘技場にそして学究の徒は剣客に早変わりしてしまうことになる。そこにあって正直さは嘲弄の的となり、羞恥の念は不名誉と目されるようになってしまった。かくしてまじめに勉強しようとする若人は、

破滅すると言わぬまでも何事も成し遂げ得ないままに終わってしまう。だが[学問の場における]喧嘩沙汰について触れるのはこの位にしておこう。

武器を用いた騒擾や不健全な娯楽が一掃されない限り学問所が繁栄することはあり得ない。フランス王フランソワ１世はその御代において、無数に存在したパリ大学の学究たちが清浄な空気を吸い、正しい方法で英気を涵養できるようにと、彼らに対しパリの都のセーヌ川近くの高台の地を提供した。そこにおいてこれらの学究たちは俗事に心乱されることなく、闊達に振る舞うことができた。そこにおいて彼らは快活さをもって格闘技を行い、障害物競走や様々の球技に、そしてまたハンマー投げや高跳び、徒競走などに興じた。こうした技は彼ら自身に負けず劣らず、それを見物するものたちをも愉しませたのである。その結果として私闘による剣戟の音は止み、骨牌や骰子を使った賭博は姿を消した。いま述べたような理由から貴兄が大学を創設せんとする都市には、健全な雰囲気を保った快活な土地柄であることが肝要となる。そこには河川や泉そして森林があることが望ましい。なぜならこれらのものがそれ自体として、学生たちを活気づけるものであることは論を俟たないからである。なかんずくそこにおいて学問が花開いた古のアテネやロードス島は、かかる雰囲気をよく保持した場所であった。

ところでガレアッツォ・ヴィスコンティは重い処罰を課すことにより、自国の臣下が別の土地の大学に進学することを禁じた最初の君主であった[26]。彼がそのようにしたのは、外部から招き寄せた学生に加え、自国生まれの学生をその地に縛りつけることにより、パヴィアの街の名声を高め、人口繁華な街に仕立て上げようと望んでのことであった。このようなやり口は、他の幾人かのイタリアの君主たちに模倣された。だがこうしたやり口は。自身の臣下に対する不信に満ちたやり口であるに過ぎない。自国において己が臣下とそこに招き寄せた外国人とを取り扱う、礼節と寛大さに満ちたやり方とは即ち、彼らに適切な消閑の楽しみを提供し、彼らに食料を十分に供給し、その特権を保護してやることに他ならない。そしてまた文筆活動を通じて彼らが栄誉を獲得する機会を開いてやったり、君主が彼らの才華を称え、彼らのために褒賞を授けたり、なかんずく多大な名声を博している学匠を招聘することである。だから大ポンペイウスは彼が全オリエントを征服した後ロードス島を訪問した際に、この地に招聘された諸学匠が主宰する学校を表敬訪問することを、自己の威信を損なうものとは見なさなかった[27]。だがここまで論じてきたような反論にもかかわらず、それ以上にもっともな理由からポーランド王ジグムント１世は、その臣下の如何なる者であろうとも、王国外の大学に留学することを禁止した[28]。スペインのカトリック両王も数年にわたり、同様の政策を実行した[29]。そのもっともな理由とは即ち、国外に留学した臣下が、すでにジグムントの時代にその端緒をもち、我々の時代に北方の全地域で弊害の頂点に達したかの如き、異端派の害悪に汚染されないようにとの意に他ならない。

第六章　司直の法廷について

生活や栄誉そして我々の財産は法官たちの手中に握られている。なぜなら人心の荒廃により相互間の愛想の良さや慈愛の念が人々に欠けるようになれば、逆に悪意ある者の暴力や貪欲が急速に増大するようになるからである。法官が我々をこのような暴力や悪意から保護してくれなけれ

ば、我々の日常生活は暗礁に乗り上げてしまうことだろう。こうした理由から都市には、王の聴聞座や元老院、高等法院その他同様の類の法廷が設置されることになる。そしてこれらの法廷は必然的に、裁判長や元老院議員、弁護士や検事、請願者の如き多数の人々が関与することなしには解決し得ない案件の処理のためと同様、正義の執行を誓願する国内の人々の殺到によっても、活況を呈することとなる。だがそれよりいっそう重要なこととは、昨今において正義もまた、金銭の介入なしには執行し難くなっているということに他ならない。金の流れ以上に人の動きを左右するものはない。鉄を自身に引き寄せる磁石の力といえども、人の耳目をあちらこちらへと振り回す金の力には及ぶべくもない。その理由はといえば金銭は、その大地が提供するあらゆる偉大さや便宜そして富をその内に孕むものであるからに他ならない。金銭を保有する者はこの世界から引き出される、あらゆるものを潜在的に保有しているのだと称しても過言ではあるまい。そして正義の執行に大量の金銭が必要とされることから、大都会は民事訴訟や刑事訴訟の全てを取り扱うわけではないとしてもではないにせよ、少なくとも重大な案件や［下級審からの］上訴をその管轄事項として独占することとなる。

このような正義の執行は、その本質を法的権威に依存する国家理性によって実行されるものである。そしてかかる手段を介してのみ支配者は、その臣下の生命・財産の管理人となることができるのである。だがこうした法による支配は同時に、我々が今しがた示唆したような臣民の側における利便にもかかわる事項である。こうしたことは世界のあらゆる地域において通用する真実であるが、取り分けてもローマ法の共通の慣習を通じて、裁判案件が処理させる地域においてはなおさらと言える。イングランドやスコットランド、そしてなかんずくトルコといった諸国においては、簡潔な審理がなされ処断が即決で下される。このような土地では都市の成長に、そこが司法機関の設置される場所であるという事実は、ほとんど如何なる影響も及ぼすことはない。なんとなればある一日の午後いっぱいにわたる時間で、証言の即座の効力のもと開廷が宣せられたあげく、重大な訴訟も結審してしまうからである。これらの国では、引き延ばされて長期にわたるような訴訟沙汰などないし、司法上の煩瑣な諸手段も審理手続も法曹関係の役人も代理人も存在しない。あっと言う間に裁判が結審してしまうので、ローマ法が要求するよりはるかに少ない時間と出費と人数とで、事が片付いてしまう。もちろん私が言いたいのは、判決を長引かせたり、法廷を際限のないものにしたりするのがよいということではない。それは既にして、現在の状態でも十分に長いものとなってしまっているのだ。だが司法業務が長引くことは慎重な配慮とか、誤りを犯すまいという意図にもとづくものであるから、徒や疎かにしして良いものではない。司法業務の延引はもっともなことながら、弊害無きにしも非ずといった態のものと見るべきであろう。そういうわけで、そこで裁判が行われ最高裁が設置されることは、我々の都市の成長にとり非常に重大なことなのである。

第七章　勤勉について

すでに勤勉について我々は国家の隆盛について論じた『国家理性論』第８巻において、子細に検討したところである。それゆえ我々は読者にその部分を参照するよう勧めたい[30]。

第八章　免税措置について

我々のこの時代において人民は、その貪欲によりあるいは財政上の必要に迫られて行われる君主たちの苛斂誅求にあえいでいる。そのため少しでも免税の可能性が見出されるや、人民は免税措置を激しく求めることとなる。ある都市の関税[31]や消費税[32]が撤廃された結果、商品と人間がそこに頻繁に流入することにより、その地の市場が急速に繁盛することこそが、何にも増して人民のこうした欲求の激しさを証するものとなっている。事実昨今においてナポリはその住民に対し認められた免税措置により、その産業と人口の両面で驚くべき成長を成し遂げた。カトリック王がそこにおいて建築物の更なる増設を禁じなかったなら、ナポリはいっそう成長したことだろう。このような建築物増設に対する王の禁令は、自身の領地からの人口の流出に苦慮する豪族たちからの苦情その他の理由によるものであった。他方フランドルの諸都市はヨーロッパの都市中においても、最も多くの物品と、最も多くの人間が行き交う都市になっている。貴兄がもしその理由を見出そうとするなら、貴兄らはかかる理由を他の何にもまして、関税の免除に求めることができるに違いない。なぜならそこに出入りする商品の取引（実際そこに出入りする取引量は計り知れないものがあるが）に際して、商人はほとんど何も支払う必要がないからである。

そこで新しい都市を建設する人は皆、人々をそこに招き寄せるため、少なくともその最初の住民に対し広範な税の減免措置を施している。加えてペスト禍に苛まれたり、戦争の惨害を蒙ったりすることにより、神により懲罰を加えられた都市を再建するため活動する支配者もまた、同様の措置を施している。三年にわたりイタリアを混乱の曲に陥れたペスト禍―それはボッカチオにより子細に記述されている―は実に無慈悲なものであったため、３月から６月までのわずか三か月の間に、フィレンツェの領内だけで 100000 人もの人の命をこの世から取り去ってしまった[33]。ヴェネツィアにおいてはさらに多くの人々の命が失われてしまったため、この街はあたかも砂漠のようなありさまとなってしまった。その結果この街の執政官たちは、そこに人を再度住まわせるため、家族とともにやってきて二年にわたり居住した者すべてに、市民権を付与する法令を発布したのであった。同じくヴェネツィアの執政官たちは、そこに食料を搬入する者に免税措置の適用を約束することにより、極端な食糧不足から救われたことが幾度もあった。

第九章　動産を自身の財として保持することについて

我々の都市に人々を引き寄せるためには、それが何がしかの膨大な商品を有していることもまた効果的である。こうした商品のある都市による所有は、こうした商品のすべてが産出されるか、あるいはその大半か、しからずんばその多くが産出される土地がもたらす恩恵によるものである。モルッカ産の丁子（グローブ）やシバ王国の香料、パレスティナの香油等々が、ある土地においてそのすべてが産出される実例である。他方ある土地でその大半が産出される実例としては、カリカットの胡椒[34]、セイロン島のシナモンの例が挙げられる。そして比較的多くが産出される例としては、キプロス島の塩やマデイラ島の砂糖、そしてスペインやイギリスの羊毛が挙げられよう。またこれに加えて、ある土地で別の土地において以上に多大な成功を収める、技術の発達というものがある。こうした技術の発達はそれぞれの土地の水質や、住民の繊細さ、あるいは彼ら

第八章　免税措置について

我々のこの時代において人民は、その貪欲によりあるいは財政上の必要に迫られて行われる君主たちの苛斂誅求にあえいでいる。そのため少しでも免税の可能性が見出されるや、人民は免税措置を激しく求めることとなる。ある都市の関税[31]や消費税[32]が撤廃された結果、商品と人間がそこに頻繁に流入することにより、その地の市場が急速に繁盛することこそが、何にも増して人民のこうした欲求の激しさを証するものとなっている。事実昨今においてナポリはその住民に対し認められた免税措置により、その産業と人口の両面で驚くべき成長を成し遂げた。カトリック王がそこにおいて建築物の更なる増設を禁じなかったなら、ナポリはいっそう成長したことだろう。このような建築物増設に対する王の禁令は、自身の領地からの人口の流出に苦慮する豪族たちからの苦情その他の理由によるものであった。他方フランドルの諸都市はヨーロッパの都市中においても、最も多くの物品と、最も多くの人間が行き交う都市になっている。貴兄がもしその理由を見出そうとするなら、貴兄らはかかる理由を他の何にもまして、関税の免除に求めることができるに違いない。なぜならそこに出入りする商品の取引（実際そこに出入りする取引量は計り知れないものがあるが）に際して、商人はほとんど何も支払う必要がないからである。

そこで新しい都市を建設する人は皆、人々をそこに招き寄せるため、少なくともその最初の住民に対し広範な税の減免措置を施している。加えてペスト禍に苛まれたり、戦争の惨害を蒙ったりすることにより、神により懲罰を加えられた都市を再建するため活動する支配者もまた、同様の措置を施している。三年にわたりイタリアを混乱の曲に陥れたペスト禍―それはボッカチオにより子細に記述されている―は実に無慈悲なものであったため、３月から６月までのわずか三か月の間に、フィレンツェの領内だけで 100000 人もの人の命をこの世から取り去ってしまった[33]。ヴェネツィアにおいてはさらに多くの人々の命が失われてしまったため、この街はあたかも砂漠のようなありさまとなってしまった。その結果この街の執政官たちは、そこに人を再度住まわせるため、家族とともにやってきて二年にわたり居住した者すべてに、市民権を付与する法令を発布したのであった。同じくヴェネツィアの執政官たちは、そこに食料を搬入する者に免税措置の適用を約束することにより、極端な食糧不足から救われたことが幾度もあった。

第九章　動産を自身の財として保持することについて

我々の都市に人々を引き寄せるためには、それが何がしかの膨大な商品を有していることもまた効果的である。こうした商品のある都市による所有は、こうした商品のすべてが産出されるか、あるいはその大半か、しからずんばその多くが産出される土地がもたらす恩恵によるものである。モルッカ産の丁子（グローブ）やシバ王国の香料、パレスティナの香油等々が、ある土地においてそのすべてが産出される実例である。他方ある土地でその大半が産出される実例としては、カリカットの胡椒[34]、セイロン島のシナモンの例が挙げられる。そして比較的多くが産出される例としては、キプロス島の塩やマデイラ島の砂糖、そしてスペインやイギリスの羊毛が挙げられよう。またこれに加えて、ある土地で別の土地において以上に多大な成功を収める、技術の発達というものがある。こうした技術の発達はそれぞれの土地の水質や、住民の繊細さ、あるいは彼ら

に関する摩訶不思議な秘密その他の理由から生じるのである。こうした技術の発達の実例として我々はダマスクスやシラーズの武具[35]、アラスの絨毯[36]、フィレンツェのラシャ、ジェノヴァのビロード、ミラノの浮き織り錦、ヴェネツィアの緋色の生地などを挙げることができよう。

この点について私は、中国においてほとんどあらゆる技術が、さまざまの理由から極めて高い水準に達しているということにつき語ることを逸したくはない[37]。このような技術の隆盛の数多くの理由のうちでもなかんずく注目すべきは、父が従事した業に子もまた従事しなければならないことが義務化されている点である。その結果、大半の子供たちが父祖の業をはなから継ぐ心構えで成長することや、父親の側もその子に隠し立てなく、愛情や熱意、精励や配慮を豊かに注いで彼らを教育することが生じてくる。その結果として中国では、職人は望まれ得る最上の美と完成へと到達することができるのである。こうした中国の職人が成し遂げる美と完成はこれを、中国からフィリピンへ、更にはフィリピンからメキシコへ、さしてメキシコからセビリアへと廻送されたきわめてわずかの物品においても、これを認めることができるだろう。

他のいくつかの都市は、多くの物品がその属領[38]で生産されたり、それがこの都市の住民により加工されたりするためでなく、これらの都市が陸地や近隣の海の支配権を有しているがために、何がしかの交通の主役となっている。陸地の支配権を持つ都市の例としては、新スペインやペルーの無限の富の終点に位置するセビリアが挙げられる。海洋の支配権を有する都市の実例としては、このような支配を通じてコーチンの胡椒[39]やセイロン島のシナモンあるいはインドのその他の富を自身に引き寄せる、リスボンが挙げられよう。これらの富は彼らポルトガル人自身によってかあるいは、彼らの発給する安全許可証を持つ者によってでなければ、決してヨーロッパに廻送されることはないのである。これとほぼ同じようなやり方でヴェネツィアは９０年間にわたり、香料貿易の支配者の如き座を占め続けていた。なぜならポルトガル人がインドを占拠する以前には、香辛料は紅海を経由してスエズへ、そしてラクダの背に乗せられたカイロへ、続いてナイル川を経て大アレクサンドリアへと運ばれた果てに、そこでヴェネツィア人により購入されていたからである。彼らはアレクサンドリアに彼らの大ガレー船団を派遣し、莫大な利潤をあげながらこれらの香辛料を、ヨーロッパのほぼ全土に分配していた。ところが今やこうした香辛料交易の流通網の大半は、リスボンに向けられている。ムーア人やトルコ人の手から奪取された香辛料は、新しいインド経路を介してポルトガル人によりリスボンへと廻送され、次いでスペイン人やフランス人やイギリス人、ついには北方地域全域の住人に売却される。このインドとの交通はかくも重大なものであるので、それだけでポルトガルが富強となり、あらゆる物資で満たされるに十分なほどなのである。

他のいくつかの都市は、多くの民族が来訪するに好都合なその立地により、商業や交通の支配者となる。こうした都市は東方におけるモルッカやホルムズがそうであるように、そしてまた北方海洋地域においてアントワープやアムステルダム、ダンツィヒやエストニアのナルヴァがそうであるように、更にまたドイツにおいてフランクフルトやニュルンベルクがそうであるように、これらの地を旅する諸民族にとり、商館や倉庫を建設する地として役に立っている。これらの諸都市に大商人たちは自身の商館を設置するが、次いでそこには、活動の利便ゆえにこの地に招き

寄せられた近隣の人々が必要とする物資が、供給されるようになった。このような活動の利便性は港の収容力や安全性、港が位置する湾や海の内懐の適当性、都市の内部あるいはその近傍を流れる航行可能な河川、湖沼や運河、平坦で安全な道路などに依存している。ところで道路について言えば現地人の言葉でインカと称されるクスコの王が、長い歳月を費やして建設した、長さ２０００マイルにも及ぶ実に快適でかつまことに平坦な、直行する二本の街道につき語ることを逸するべきではないであろう。それはかの古の偉大なローマ街道にも劣らぬ代物である。峻険なる山岳が削り均されたり、深さ極まる渓谷が埋め立てられたり、恐るべき岩塊が取り除かれたりしたのを、我々はそこに見て取ることができるだろう。またこのインカ街道のあちらこちらには、樹木が列をなして植えられた。これらの樹木は影の差し伸べる涼により人を疲労から回復させ、またそこに欠けることのない小鳥たちのさえずりにより、道行く人に筆舌に尽くし難い喜びを与えている。インカ街道の敷設にあたって重視されたのはこうした心身の安らぎであって、必要な物資を豊富に備えた旅籠でもなければ、さながら競い合っているかのようにその壮麗さを賑々しくも誇示する邸第でも、心楽しい山荘でもなければ、うきうきするような街区でも、そのほかのいろいろなその多様性により目の保養となり、その驚異により心を楽しませる自然と人工のよろずの事物でもなかったのだ。

だがここで我々の当初の議論に立ち戻れば、立地の自然の利便を心得るとともに、技術の力によりこれを適切に増大させることができる君主は、まことに称賛に値する存在である。こうした事業として我々は例えば、岸壁の設置により港の安全性を高めたり、積み荷の上げ下ろしを促進したり、海を海賊の襲撃から守護したり、河川を航行可能としたり、大量の物資を集積することができる倉庫を建設したり、道路を山岳地帯でも平原地帯でも等しく真っ直ぐ快適なものにしたりすることが挙げることができる。この点においてもまた賞賛に値するのは中国の王である。なぜなら中国の王たちは、夏に劣らず冬に人馬が容易に移動できるように、そしてまた積み荷として車馬に乗せられる商品がそこを苦もなく通行できるように、信じられないほどの額の金銭を費やして、この名高い王国のあらゆる道路を整備し、数限りない河川に架かる石造りの橋を建設し、平地を天然の岩石で舗装したのである。この点においてイタリアの諸君主が大いに見劣りすることは、疑う余地がない。イタリア諸国にあっては、冬になれば沼地に落ち込んで馬が溺死したり、車が沈んだりすることは日常茶飯事である。それゆえ物資の流通は極めて困難となり、通常は一日で済むような旅路が、時に四苦八苦したあげく、三日あるいはそれ以上かかるものとなってしまう。またポワトゥやサントンジュそしてボースやブルゴーニュの例からもわかるように、イタリアに劣らずフランスの大半の地域にあっても、道路はあちこちで寸断されてしまっている。だがここはこうした名高い地域の実況検分を行う場ではない。我々は他の議論に移ることとしよう。

第一〇章　支配権について

ある土地に繁栄をもたらす最大の要因こそが支配権に他ならない。なぜなら支配権はその地に対する他地域の従属をもたらし、他地域の従属は地域間の競争を、地域間の競争は繁栄を招来するからに他ならない。他の都市に対して支配権や君主権を有する都市には、さまざまなやり方で

公私の財が流入してくる。また諸君主の大使たちや諸都市共同体の代理人たちも、そこにやってくることになる。また刑事民事を問わず様々の重大訴訟がそこで審理され、またさまざまの上訴がそこにおいてなされることとなる。そこでは共同体と私人たちの案件や交渉が、資格ある人々によって取り扱われ、かつまた国家の税収がそこに徴収されまた消費される。また他地域の重要で裕福な人士がそこに定住したり、あるいは短期で滞在したりしようとする。こうした一切から多大の金銭が生み出されるとともに、これらの金銭は遥か遠国から商人たちや職人たち、そしてあらゆる種類の用務や職業に従事する人たちを招き寄せるため有効に使われる。このようにして都市は建築物の壮麗さや、人口の繁多さ、あらゆる物資の豊富さを介して次第に成長して行く。都市はそこが有する支配権の大きさに比例して成長する。

何がしかの注目すべき司法管轄権を備えた、そしてまた目下において備えているあらゆる都市が、この支配領域というものをもちこれを誇示している。それは例えばピサやシエナ、ルッカやフィレンツェ、ブレッシア、といった都市であるが、ブレッシアの周辺属領は縦幅 100 マイル、横幅４０マイルに及んでおり、肥沃極まる平野に加えて、多くの重要な渓谷やまた多くの村落や城邑を領域中に孕んでいるが、それらの城邑はそれぞれ 1000 戸以上の〈家族〉[40]を擁しており、その人口の総計はおよそ 35 万人に達する。ドイツにも同様の条件を備えた、ニュルンベルクやリューベックそしてアウグスブルクのような都市が数多く存在するが、その多くは帝国自由都市としての資格を認められている。フランドルにおける同様の存在がゲントである。この都市は戦争ともなれば軍旗を広げて掲げるや否や、100000 人の戦闘員を集結させることができる。ここにおいてはスパルタやカルタゴ、アテネやローマそしてヴェネツィアといった諸都市ついて語ることはすまい。ただこれらの都市の大きさはその支配権の拡大に応じて拡大していったため、他の都市は措くとしてもカルタゴはその最盛期には周囲２４マイルに達したし、ローマに至っては―無数の周辺村落に加えて―50 マイルにも及んだのである。ローマの周辺属領は一方ではオスティアにまで広がっており、他方においてはほとんどオルティコリに達していて[41]、そこうちには数限りない村落がひしめき合っていた。だがこのあたりで他の話題に移ることにしよう。なぜならこうした点については、この後に君主の居所につき語られる事柄によって取り上げられるからである。

第一一章　貴紳の居所について

イタリアの諸都市がフランスの諸都市をはじめ、ヨーロッパ各地の都市より概して大きなものであることについては、次のような決して見落とすべきではない理由がある。即ちイタリアにおいて貴紳は都市に居住しているが、フランスにおいては［田園地帯に位置する］彼らの城塞に居住しているのである。この城塞とはつまりは水を満々と湛えた堀に囲まれ、不意の襲撃に対処できるような防壁や望塔を備えた宮殿のことである。もちろんイタリアの貴紳もまた、フィレンツェやヴェネツィアそしてジェノヴァの周辺属領地帯に見られるように、山荘において豪奢な生活を送っている。こうした山荘はそこに用いられる高品質の建材と、そこに込められた工夫の卓越とにより単に一都市にとってのみならず一王国にとっても誇りとなるような造作物である。これ

らの地域はそうした山荘に満ちたわけだが、にもかかわらず貴紳と邸第いう点について言えばフランスは、イタリアに比べて概していっそう豪華であるし、またその数の点においても後者を凌駕している。なぜならイタリアの貴紳はその出費やその配慮を、一部は都市に一部は周辺部の属領にと振り分けており、その上そのより大きな部分を属領よりもむしろ都市へと宛てているからに他ならない。だが他方フランス貴紳は彼らの権勢を自身が所領とする属領地帯から吸い上げており、都市についてはほとんど気に留めようともしない。フランスの貴紳にとって都市とは、[宿泊するための] 旅籠がありさえすればよい場所であるにすぎない。

他方他の国にも増してイタリアでは都市における貴紳の住居は都市を名高いものにし、また繁華なものにする決め手となっている。それは単に彼らの一族郎党がそこにやってくるためのみならず、それ以上にこうした豪族連中自身が都会で、互いの競争意識のために鷹揚に金を使ってくれるからである。田園で貴族は田夫野人との交流のうちに身を置き、粗末な服を身にまとっているに過ぎないが、都会では栄誉ある人々を不断に見、また彼らから見られることとなるからである。このようにして都市における建築が流行となり、技芸が発達することとが必然となる。こうしたわけでペルーの皇帝は己が帝都クスコにいっそうの荘厳を加えまた繁華となすために、単に地方の首長や有力者がそこに住むように望んだのみならず、彼らのそれぞれがそこに自身の邸館を造営するようにと命じたのであった。そしてこれらの豪族たちが競争によってこのことを行ったため、クスコは極めて短期間のうちに大きな成長を見たのである。今日では同じようなことが、ロンバルティアの諸君主により試みられている。

またアルメニアの王ディグラネスは自身の大都ティグラノセルタを造営するにあたって、この地に移転されず他の場所に残っている財産は、これを国庫に収公するとの法令を発布して、多数の貴紳や栄誉・財産を有する人がこの地に移住するように強制した[42]。またこれと同一のことこそ、ヴェネツィアがその当初において、極めて短期間に目覚ましい成長を遂げた要因でもある。なんとなれば近隣から今日ヴェネツィアが奇跡的に位置している小島に逃げ込んだ人々は貴族や富豪ばかりであり、彼らは自身と一緒にその財産をそこに運び込んだのであった。そしてこれらの資産を活用しつつ彼らは、この湾が提供する利便によって航海や交易に従事し、わずかの間に近隣の島嶼や島々の支配者となった。そしてこの資産を利用して彼らは自身の祖国を、壮麗な建築物や計り知れぬほどの宝物によって飾り立て、結果としてこの都市を今日われわれが望見し賞賛するが如き繁栄と権勢へと導いたのである。

第一二章　君主の居所について

少し以前の支配権を取り上げた章で我々が論じたのと同様の理由により[43]、都市の美化とその拡大のためには、君主がそこに居住するということが極めて有効である。こうした君主の居所の壮麗さは、彼の支配権の大きさに合致する。というのも君主が居住する都市に、議会あるいは世に謂う処の元老院や、最高裁判所、枢密顧問会議といった諸機関が設置されるからである。加えてそこにおいては重大なあらゆる交渉事がなされることになるのみならず、あらゆる諸侯、あらゆる重要人物、共和国や王の大使たち、従属都市の代理人たちがくまなくやってくることになる。

官職や栄誉や渇望する者たちも皆そこに集まるし、国庫収入もここに集められまたここで消費される。このことは大半の重要で評判の高い都市の実例を通じて容易に理解できる。世界最古の王国はエジプトである。そしてその歴代の王たちはその居所を、ある者はテーベにまたある者はメンフィスに置いた。かくしてこの二つの都市は刮目すべき程の壮麗さを備えるに至る。その結果ホメロスが詩的な表現で「百門の都市」と号したテーベは[44]、ディオドロスも記すように周囲17マイルに及んだ[45]。この都は公私の多数の壮麗な建物で飾られ、多数の人間で満ちていた。それに少し劣るのがメンフィスであった。続く諸世紀にはプトレマイオス家の諸王が、アレクサンドリアに宮居するようになる。この都は数え切れぬほどの建築物や人間たち、そして名声や富に溢れかえった。そして先の二つの都市即ちテーベとメンフィスは、エジプト王国の衰退とともにまずはカルデア人の支配下において、続いてはペルシア人の支配下に置いて荒廃してしまい、ついにはほとんど人が住まないまでに衰えてしまった。

その後エジプトを支配したスルタンたちはアレクサンドリアを捨てて、カイロへとその居を移す。カイロはそこへの君主の転居によって、わずか数百年の間に人口繁華な都市となり、それももっともなことながらその名に〈大〉と冠せられるほどの繁栄を誇るに至ることとなった。さてスルタンどもは万が一この都市の住民が何かの拍子で彼に対して一斉に蜂起したなら、この地に住む無慮無数の人間たちの故に、自身の安寧が損なわれてしまうと考えた末に、幅広く底深い堀によって分断してしまった[46]。その結果カイロは単一の都市であるかのようには観じられず、むしろ小さな地所の集合体に過ぎないかのように見えるのである[47]。この都市には16000の、或いはアリオストの言によれば18000の大街区が存在している[48]。これらの街区は夜ともなれば、鉄でできた街門によって閉鎖されてしまう。この都市の周辺は8マイルであるが、この空間の中においてそれらの人々がのびやかにもはたまた、我々と同様に快適な生活を営んでおらず、むしろ概しては互いに押し重なるようにすし詰めなった結果、そこには無数の大衆が存在することとなった。ペストがこの都市を襲わなくなるようなるというようなことは、ほとんど考えられない。それどころか7年ごとにそれは目に見える形で流行し、それが一回の流行につき300000人以上の人を殺してしまうようなことがなければ、他愛もないものでしかない。[オスマン・トルコに征服される以前の] スルタンの統治時代には、一日に千人以上の人間が死なないときには、この都市では健全な状態と目されていた。今日の世界において多大な名声を有しているカイロの都についてあまりに語りすぎた。だがここで別の主題に話頭を転じよう。

古のアッシリアにおいてその諸王は、ニネヴェにその居を構えていた。それはディオドロス・シクルスの記す処によれば外周で480スタディオンに及んでいたというが、それは即ち今日の尺度に直せば60マイルということになる[49]。またその直径は150スタディオンであった。この都には取り分けてもたいそう大きな街区が存在していた。それらの街区については『聖書』が、ニネヴェは端から端まで歩くのに三日を要すると記すほどであった[50]。カルデア人の王たちの宮居はバビロンにあった。この都もまたヘロドトスの記す処によれば、外周480スタディオンを有したという[51]。そしてこの都市の城壁は幅にして50キュービット、高さにして200キュービット以上あったという。アリストテレスはこの都市の規模を一段と巨大なものと踏んでいた。なぜな

ら彼の記す処によれば、バビロンが［アレクサンドロス大王に］占領された時、この都市の一部では三日間も都市の陥落を聞き及ぶことがなかったそうだからである[52]。この都は100の城門を備え、そのすべての扉が青銅で作られていた。またそこには一つの城塞があり、その周囲は20スタディオンに及んでいた。その住民は極めて多く、ペルシアの強大極まりない王キュロスにも歯向かおうとしたほどであった。この都は女王セミラミスにより造営されたが、それを驚くばかりに拡張したのはネブカドネザル王であった。この都はその後この地方に押し寄せた、スキタイ人とかその他の野蛮な民族の洪水に飲み込まれ荒廃してしまったが、サラセン人の教主ブジャファル[53]により再建された。彼はこの再建のために1800万スクーディもの金を注ぎ込んだという。ジョーヴィオの書き記す処によれば、もしこれを古の城壁の総延長で比較すれば。今日にあってもこの都はローマよりも大きいという。だがその中には菜園や広大な庭園は言うに及ばず、狩猟用の森林とか農作業場をも含んでいる[54]。

メディアの王たちはエクバタナに、ペルシアの王たちはペルセポリスに都した。この都の大きさについては。確かなことがわからず推測に頼るしかない。他方、今日のペルシアの王たちはダブリーズに都している[55]。そして今日のペルシア帝国が以前ほど巨大でないのと同様に、彼らの首都もまた、かつてのそれに比べるとさほど大きなものではない。何人かのそれをより大きなものだという人もいるが、今日のペルシアの首都ダブリーズは、全周で16マイルと相当長いものであり、ペルシアにおける他のほとんどすべての都市と同様、その中には多数の庭園があり、また城壁をめぐらさずに済ませている。タルタリアやその他の東アジアの地域は、その地における諸君主国の強大な権勢のゆえに、都市もまた世界の他の地域と比べた場合、いっそう大きなものとなっている。タタール人は今日二つの強大な帝国を有している。即ちタタール人のモンゴル帝国と、カタイ人のモンゴル帝国である[56]。モンゴル人は今日においては、その領域を信じ難いばかりに拡張している。なぜなら彼らの君主であるマハムードは、その古の境域に充足せず、わずか数年の間にガンジス川とインダス川にはさまれた地域を占拠してしまったからである[57]。モンゴル人の帝国の首府はサマルカンドである。この都はタルメラン（チムール）により全アジアから強奪された戦利品によって、信じられないほどに飾り立てられた。大チムールはこのアジアの地全域において、あたかも恐るべき暴風雨か破壊力に満ちた洪水ででもあるかの如く、多くの古代からの由緒を正しい諸都市をなぎ倒して、無数の富をこれらの都市から運び出した。その他の事例に言及するまでもなく、ただダマスクス一都市からだけでも彼は、略奪品や選び出された動産において8000頭分もの戦利品をかき集めたのである。サマルカンドは偉大さと権勢に満ち溢れているため、いくつかの古代の記録において我々は、そこに6万頭もの馬が育成されていること読むことができる。だが大タルメランの死後、その息子たちによってそれがいくつかの王国に分割されてしまったのと同様に、今日においても、チムールの覇権を継承したカンベイ王国の征服者マハムードの息子たちにより等しく分割されてしまった結果、帝国の力が著しく衰弱してしまったため、サマルカンドの偉大さや壮麗さも、古に比して色褪せたものとなってしまっている。

さて小生はただいまカンバイ王国について言及したところであるが[58]、この王国には二つの想起すべき主要都市が存在している。そのうちの一つがカンバイで。いま一つがチトルである[59]。

カンバイはその名がこの地域全体の名になるほどの、極めて巨大な都市に他ならない。幾人かの人はこの都市が、15 万の〈竈〉を有していると記している。そして一般にそうされるように一〈竈〉を五人と計算すると、この都市には 80 万人をやや下回るほどの人間が住んでいると想定し得る。また他の人はそれをずっと小さな都市と見積もっているが、どちらにせよこの都市が、富強極まりない王国の多大な権勢を誇る王の都に相応しい、名高い都市であることには間違いがない。この実にカンバイの王こそ、ムガールの王マハムードに対する戦争に、50 万人の歩兵と 15 万人の騎兵を動員した人物であり、この 15 万人の騎兵の内でも 3 万人は、我々の謂う処の重装騎兵としての装備を備えたものであった。一方チトルのその周囲 12 マイルに及ぶ都市で、多数の壮麗な建物を有し、優雅な街区に恵まれ、悦楽に満ちた都市で、これと比肩しうる都市は他にはごく数えるほどに過ぎない。そこでこの都市はその住民たちから「天の傘」と称されるに至っている。当世この都市はクレメンティナ女王の居所であったが、上記のカンバイの王の造反の結果彼女は、1536 年に強制的にその座を追われてしまった[60]。

俗にカタイの大カーンと称されるカタイ＝タタール人の皇帝は、その太祖にかの偉大なジンギス・カンを有している。このジンギス・カンこそはスキタイの地のアジア部分から発し、その企図の雄大さとその勇武によって、タタール人の名声を高めた最初の人物であった。なぜなら彼は中国を制圧し、インドの大半から貢納を納めさせ、ペルシアを征服し、アジア全域を震撼させたからである。この偉大な君主の後裔たちはカンバリクの都城に宮居しているが、この都は単に巨大であるのみならず大変壮麗な都である[61]。その周辺の村落に加え都の周囲は 28 マイルに達し、その他の商品にと共に中国全土から毎年、荷車にしておよそ千台分の絹がそこに運び込まれてくる。このことからもこの都市における商取引の活発さや、商業の隆盛や、工芸の多彩さや、住民の繊細優雅な生活が推し量られるのである。

さてここで話を中国に移そう。その領域の広大さにおいて、その人口の豊富さにおいて、その富の質量にわたる豊かさにおいて、中国に勝る国家は歴史上存在しなかった（ここで私が語る国家とは諸王国が一つにまとめられた国家のことである）。また中国ほど長きにわたり存在し続けた国家もない。それゆえその王たちが古より宮居した諸都市は、世界にかつて存在したあらゆる都市よりいっそう壮大なものとなっている。こうした都市を三つ挙げることができる。即ちスンティエン、アンチン、パンチンの三都市である[62]。私が理解する限りにおいては、スンティエンがもっとも歴史ある都市であり、キンザイと呼ばれる一地域の首邑ともなっているが、この都自体が俗にこの名をとってキンザイと呼ばれてもいる[63]。この都は中国の極東部に位置しており、そこに流れ込む四つの川により形成される大きな湖の中にある[64]。その四つの川のうちもっとも名高いのが、ポリサンゴ川である[65]。この湖には多数の小島が散在いるが、これらの小島はその位置の快適さと、その空気の清浄さ、そして手工芸の繁栄やそこにある諸庭園の優美さによって、とりわけ悦ばしい場所となっている。またこの湖は緑なす木におおわれた岸辺を持ち、清澄な小川やたくさんの泉により潤わされ、また数多くの壮麗なる邸宅により飾られている。この湖に川が流れ込む河口は最大にして 4 リーグに達するが、他方いくつかの個所においては 2 リーグを超えることはない。スンティエンの都市自体は河口からおよそ 28 マイル離れた地点に位置しており、

その周囲は100マイルにして広々とした道路を有し、水にも土地にも不足するところがない。陸地はすべて舗装され座るための美麗な露台で飾られている。そこに流れる運河は名のあるものだけでも15に及び、そこには多くの壮大な橋がかけられているが、それはあまりに巨大なため、その下を多数の帆船が通行できるほどである。もっとも主要な運河はこの都を、そのおよそ半ばで断ち割っているが、その幅はおよそ一マイルにも及んでいる。そこにおよそ80の橋が架かっているが、それはこれに勝る優美なそしてまたこれに勝る快適なものがないほどの偉観である。この都市に存在する広場の壮麗さや邸宅の豪華さ、街区の美しさや住民の数えきれないばかりの多数、商人たちの限りない競争、金銀は別としてさらには黒檀や象牙で際立つ数えきれないほどの帆船、都市に出入りする計り知れない量の物資、またこの都市に満ち溢れる娯楽の数々について語ろうとすれば、それは果てしの無い話となってしまうことだろう。ともあれこれらの事象によりこの都はまさに、〈天都〉なるその別称に相応しい存在となっているのである[66]。

だがパンチンとアンチンもまたこれに劣らぬ都市である。だが中国について言及した以上は、その地にある他の都市の巨大さについて、今日までに入手された報告に基づいて筆を及ぼすこともまた、我々の関心を引くことではあろう[67]。カンタンは［我々ヨーロッパ人には］よく知られた町だが、別に最も大きな町の一つという訳ではない[68]。だがこの地で盛大に交易を行うポルトガル人の言によれば、この都市はリスボンよりも巨大なのである。リスボンと言えばコンスタンティノープルとパリを除けば、ヨーロッパでも最大の都市であるにもかかわらずだ。スーチョはといえばセビリアの三倍は大きな街だとされる[69]。なぜならセビリアの都市の周囲が6マイルに過ぎないのに対して、スーチョのそれは18マイルに達しているからだ。またウーチョはその大きさにおいてスーチョを上回ると言われている[70]。チンチェオはどこにでもあるような街の一つであるに過ぎないが、そこを実見したアウグスティヌス会の神父たちによれば、戸数70000戸を数える都市であるという[71]。だがこのことは決して信じ難いことではないだろう。なぜならマルコ・ポーロの報告がそれ以上のことを伝えているし、さらに今日にあって中国の富裕さというこの事実は、聖俗の多くの人物そしてポルトガルという一国の手を経て、我々が日々知ることのできる情報だからである[72]。それを否定するのは、自分が思慮深いというより愚か者であることを証明するようなものである。だが読者を楽しませまた満足させるにあたって、中国がこれほどまでに人口多くまた壮麗な都市に満ち満ちた地であることのはっきりした理由を、追い求め続けることも無駄事ではなかろう。

天の恩恵により、星辰の隠微な我々に知られることなき影響により、あるいはその他の理由により、それがどのような地であれ、我々から見て極東にあたる中国というこの世界の一隅は、それが何ゆえであるかはわからぬものの、物資の生産において他の地域に勝るものを持っていると想定される。その結果他の地域には生産することができない、卓越した多くの事物が、中国都市の幸いなる街区から生み出されているのである。たとえばシナモンやナツメグ、丁子や胡椒、樟脳や白檀、乳香やアロエそしてインド白檀といった産物である。そればかりではない。洋の東西どちらにおいても産出される品物においても、かの地の産物は当地の産物よりずいぶん優れている。たとえば真珠や金、ダイヤモンドやエメラルドその他の貴金属の類の品質が、そのことを証

立てている。というのも西洋産の真珠は東洋産の真珠と比較すれば、あたかも金に対する鉛のようなものでしかないし、同様にインドから伝来する胃石は[73]、ペルーからのそれにはるかに勝る品質を有するものだからである。中国は西洋から見て大地の東の果てに位置する土地であるから、この地は東方に帰される全ての完全性を享受しているのである。

第一に人間の生活に他の何にも増して重要なものは大気である。中国において大気は一般に極めて温和である。それはこの国の大半を取り巻き、また無数の入り江や湾によってその中に入り込む海の近さによるものである。またその地形は概して平坦で、日用に用いられ生活を支える品々はもちろん、あらゆる種類の精妙なる事物の生産に適した性格を有している。山や岡はあらゆる種類の種類の樹木により絶えず覆われているが、その一部は野生のものであり、またその一部は人の手により果実を実らせる類のものである。他方平地には米や大麦、小麦そして豆類で満ちている。庭園には我々がよく知っている果物に加えて、薫り高いメロンや清雅な桃、完全なイチジクそしてあらゆる形の卓越した味わいのレモンやオレンジを供給している[74]。また彼らはそこから味わい深い果汁を絞り出すある種の草を栽培している。それはかの地ではワインに代わって常飲されるもので、彼らの健康を保ち、ワインの濫用によって我々が苦しむような病苦から彼らを解放している[75]。また彼らは羊をはじめとした多数の家畜の群れや、多数の鳥たちや狩猟の獲物となる獣を有している。また彼らは羊毛や高価な毛皮、綿や木綿そして途方もない量の絹に恵まれている。そこには卓越した金鉱、銀鉱そして銅鉱がある。また大変優れた真珠が生産されている。またこの国には砂糖、蜂蜜、鉛丹、大黄、樟脳、大青[76]、麝香、アロエ、キナノキがたくさんある。加えて中国産の陶磁器に比肩するものは世界のどこにもない。河川やその他あらゆる水源がこの国の諸地域を貫流しており、航行や灌漑に言葉に尽くせぬ程の利便を提供している。この国の水の中には、地上における果実に劣らぬほどたくさんの魚たちがいる。なぜならこの国の川や海がこうした生き物を数限りなく供給するからである。この国においては水陸両圏にわたって多大な肥沃さがある上に、それらの要素に対する人間の手による言舌尽くし難いほどの丹精がそれに増し加えられている。こうした丹精を通じて可能な限りのものが、こうした要素から引き出されているのである。このような結果は二つの理由に基づいている。一つはこの国が有する途方もない人口による。中国の人口はおよそ六千万人と見積もられている。またいま一つの理由には、彼らが有する極端なまでの勤勉さがある。それは個々人がその菜園を耕作し、そこから収穫を引き出す点に発揮されるとともに、何者も遊惰に日を過ごさぬよう仕向け、些かの土地と雖も耕されぬままに放置されないよう取り計らう、役人たちの努力にもよっている。

技芸の発達についてはこれを弁じるまでもない。なぜなら技芸の多様性と卓越性において、中国に勝る国は存在しないからである。それはこれまた二つの理由に依っている。まず一つの理由は既に触れたことではあるが、中国ではすべての人間が、なにがしかの働きをなすことを強制されているのである[77]。目の不自由な者や手足のない者ですら、完全に能力を失ってしまった者でない限りは、何らかの生産活動に従事させられている。中国太古の王ビテイの法によれば婦女子は、その父の業に従事することを強要されている[78]。少なくとも貴人や権門の婦女子は、糸巻棒や針を使って機織りや裁縫の業に従うよう強要されるのである。中国において技芸が発達した今

一つの理由とは、子弟がその父の業を何が何でも学ぶよう、強制される点にある。その結果職人がこの国には豊富に存在することとなり、また子供たちは彼らが男の子も女の子も誕生するや否や働く習慣を身に着けるからである。かくしてこの国において技芸は、その到達し得る限りの頂点に達することとなるだ。如何なるものも無益に捨てられてしまうことはない。水牛や普通の牛その他の家畜の糞で養魚池の魚たちが養われる。我々が象牙を使ってそうしているのと同じように彼らは、犬やその他の生き物の骨を利用して彫刻を行っている。襤褸切れを利用して紙が作られる。

中国においては大地が産する収穫と人間の働きの量と多様性がかくも多大なものであるため、この国においては他の何物も必要としないほどである。それは他のいかなる国と比べても多大な生産力を、この国に授けている。それは他の事物について述べるまでもなく、絹の量がこれを実証している。中国において生産される絹の量は、信じられない程のものである。絹は中国からポルトガル領インドに向けて、年に 3000 キンタルも輸出されている[79]。フィリピンに向けては輸送船 15 隻分さらには日本やカタイの地に向けても、信じ難いばかりの分量の絹が輸送されている。それはカンバリクの都に運び込まれる絹の量について、先に我々が論じたことからも推し量られる通りである[80]。それが大量に生産されるが故に中国人たちは、彼らの産物を実に廉価に販売しているがそれは、こうした中国製品を、彼ら中国人が自身の品物をそこに持ち込むフィリピン群島に、買い求めにやってくる新スペイン（メキシコ）の商人たちが感嘆するほどのものなのだ。その結果としてフィリピンとの交易は、カトリック王陛下にとっても有益というより不利益の多いものとなってしまった。なぜなら中国産品の質の良さによって、従来スペイン産品を消費してきたメキシコの住民たちが、こぞってフィリピンにやってくるようになってしまったからである。だがかかる連中を手なずけ、こうした経路を通じて偶像崇拝の恐るべき暗闇に囚われているこうした人々を、我々の聖なる教えに導き、カトリック教会の懐に迎え入れんがため、カトリック王陛下はこうした不利益を意にも介されないのである。

ここまで述べてきたことからその自然条件とその住民の努力の双方により、中国が如何にしてその無限の民に生計の糧を与えているかがわかるし、その結果としてそこに世上に語られる如く多数の人民が居住していることも納得できよう。筆者はここで中国がこのような条件を享受するに至った要因として、更に次の二つのことを付け加えたいと思う。即ち中国の王には新領土獲得のための戦争が許されてはおらず、専らこれまでの領域を防衛するための戦争だけが許されているからである。その結果としてこの国は、永遠の平和を享受しているのである。平和以上に国家を豊かにする要因があるだろうか。いま一つの理由とは即ち、司政官たちの許可なくして、中国人が国外に出ることが許されないことが挙げられる。かくして人間が国外に流出しないため人口が継続的に増大してきた結果、中国に住む人間の数は量り知れない程となり、その諸都市は巨大化しその領土は限りのないものとなった。それどころかいまや中国は、全体として一つの巨大な都市を形作っているのである。

我々イタリア人は自惚れが過ぎ、また我々自身の国の礼讃者でありすぎるため、おのずから夜郎自大なものとなってしまう。イタリアの形態は縦に長く横に狭い。そしてこのためアペニン山

脈によって縦に両断されてしまっている。その結果として航行可能な河川は極めて稀となり、そこに大都市が存在することができない。イタリアの河川がガンジス川やメナム川、メコン川その他のアジアの大河川に匹敵するものだなどとは、とても言えたものではない。またティレニア海やアドリア海が大洋に匹敵するような代物だと、言えるはずもない。その結果として我々の交易はカンタンやマラッカ、カリカットやホルムズ、リスボンやセビリアその他大洋に面した市場に比べて、とてもささやかなものであるに過ぎない。さらに付け加えるならマホメット教徒どもと我々の間にある敵対関係が、我々から対アフリカ交易のすべてと東方交易の大半の利を失わせてしまっている。我々のイタリアの最良の部分ともいえるナポリ王国とミラノ公国はカトリック王の支配下にあり、残余の国々は決して大国ではない。そのためその首都もまた大した都市ではないのである。だが我々はここでその議論を、その出発点に引き戻すべきであろう。

君主の居所となるということは大変な効果を持つ事柄であるから、ただこのことだけで都市が一挙に形成されるに足りるのである。フランチェスコ・アルヴァレスの言によればエチオピアにおいては、この国が非常に広大であるため一つで 1600 戸を超える集落は全くないという。それどころか 1600 戸という水準に達する集落すら、極めて僅かしかない[81]。そのためエチオピア人が大ネグスと称し[82]、我々が誤ってプレスター・ジョンと見なすところのこの国の王は[83]、一定の居所を持つことがない。従ってエチオピアの王はその宮廷の所在地に、他の国の首府となる大都会に代わる機能を果たさせるのである。そのためその場所がどこであろうと、この王が一時的に居を定める場所には、国中から集まった多数の天幕や楼閣がひしめき合うこととなる。他方アジアにおいてなにがしかの注目に値する都市はすべて、諸侯の居所となっている都市である。ダマスクス、アンティオキア、アンカラ、トレビゾンド、ブルサ、エルサレムなどがこれにあたる[84]。

だがここでは我々のヨーロッパに話を移そう。帝都の座の移行はローマを縮小させ、代わってコンスタンティノープルを繁盛させたが、この繁盛は今日でものこの都がトルコの大君主の座所であることにより維持されている。この都は世界において最も美しく、また最も便利な場所に位置している。それはヨーロッパに位置しているが、アジアの地からも 400 歩とは離れてはいない。それはエウシノ海とプロポントゥス海という二つの海を支配下におさめている[85]。前者はその周囲 2700 マイルに及び、後者は長さ 200 マイルにわたって広がり、多島海に達している[86]。この地域の天候はさして荒れるものではないため航海に差し支えることはほとんどないから、このコンスタンティノープルという繁華な都に、これら二つの海域から物資を運び込むことは容易である。もしそこに航海可能な相応の河川があったなら、この都に欠けるものは何一つなかったことだろう。この都は周囲 13 マイルであるが、この範囲の中に 70 万人の人間が居住している。だが三年ごとにこの都では黒死病がはやり、たくさんの人間が死んでいる。そしてこの周期的な黒死病の流行はやむことがない。だからこの惨事がエジプトのカイロを七年ごとに襲うのと同様にこの都を、そこが健康上極めて適切な場所であるにもかかわらず、さながら猩紅熱ででもあるかのように、三年ごとに周期的に襲う理由を考察することは価値のあることだと言えよう。だがこれを考察することは他の機会に、そしてまたより高い才覚を持つ人に譲ることとしよう。

コンスタンティノープルには七つの丘が存在する[87]。東方に面した海岸上にトルコの大君主の

禁域がある[88]。その禁域を包む城壁は3マイルに及んでいる。またそこには130基の台座を備えた海軍工廠も存在する。その立地の美しさからも、その港の快適さの上でも、海との接続の利便性の上でも、その住民の数からいっても、その交通の繁華なことから見ても、そしてまたその地がトルコ大君主の座所である点からいっても、コンスタンティノープルはヨーロッパの諸都市中、第一等の地位を占めている。なぜならトルコ大君主の宮廷はそれだけで、歩騎兵合わせて3万人の兵士を抱えているからである。新たに一国の首府となったアフリカのアルジェは、そのために多数の人口を擁するようになっている。ティレミスはその最盛期において16000戸を有していた[89]。チュニスは9000戸である。モロッコには10万人の人間が住んでいる。今日アフリカにおいて最も強盛な君主の座所たるフェズには75000人が住んでいる[90]。

キリスト教諸国（筆者はこれを多数の肢体を持つ一体のものとして語っている訳だが）のなかにおいて、もっとも強大で最も多数の人口を有し、最も富裕な国といえばフランスに他ならない。なぜならこの国には27000もの小教区があり、1500万以上の人間が居住しているからだ。そのうえこの国はその他の国が比肩することがかなわない程、自然の恵みによって極めて豊饒であり、また人間の営為によって極めて豊かとなっている。この国の国王の居所はその昔からパリであった。このためパリはキリスト教世界において最大の都市となっている。この都の周囲は12マイルで、その内部には45万人の人間が住まいしている。これらの人々は膨大な量の食料により養われ、またそれを見たことがない人には信じられないほど多量なあらゆる物資の流入により、彼らの生活は支えられている。イングランド王国、ナポリ王国、ポルトガル王国、ボヘミア王国、フランドル伯領、ミラノ公国－これらの国々はその領土の大きさやその勢力の点から見て、ほぼ対等の国々である。従ってこれらの国々において君主が座所を定める都市の大きさや豊かさもまた、ほぼ対等である。このような君主の座所となっている都市とは即ちロンドン、ナポリ、リスボン、プラハ、ミラノ、ゲントといった諸都市である。これらの都市はそれぞれおおよそ16万人ほどの人口を擁している。エチオピアやインド、ブラジルとの交通がリスボンを他の都市より、いっそう大きな都市となしていることは事実である。またロンドンの繁栄は、イングランドの競争相手である低地地方に生じた革命のおかげを蒙っている。この３０年来ナポリもまた同様に成長してきた[91]。

一方スペインにはさして大きな都市は存在していない。その原因はといえば一つには、この国が昨今まで実はいくつかの小王国に分割されてきたからであるし、またそれを利用して大量の人間を養うための食料を１か所に集めることができるような、河川や水源に乏しいためでもある。だがスペインにも他に比べよりいっそうの名声を博し壮麗さを誇る都市があるが、それらはバルセロナやサラマンカ、バレンシアやコルドバ、トレドやブルゴス、レオンといったような古来の王国がその座所を定めた都市に他ならない。これらの都市は美しい年でありまた多くの人口を有してはいるが、それでもイタリアの第二級の都市を超えるものではない。これらの都市に加えてスペインにはグラナダがある。これはムーア人が多年にわたりそこを治め、多くの華麗な建造物でそれを修飾した都市である。この都市は半ば山岳地に半ば平地に位置している。この都市の山岳部分には互いに独立した三つの丘がある。そしてグラナダにあらゆる種類の豊かな水源がある

が、この都市の快適極まりない属領地帯はこうした水源によって潤わされている。グラナダの属領地帯が他の比肩を許さぬほど多数の人間に住まわれ、耕作されているのもまたこの水源の存在による。セビリアは新大陸の発見以後、急速なる成長を遂げてきた。というのもこの都市が、新大陸からヨーロッパに年ごとに多大の財宝を運び込む輸送船の中継地となったからである。セビリアの都市の周囲は6マイルに達しており、そこに80000以上の人間が居住している。この都市はベティス川の、あるいは我々がそう呼ぶところのグアダラヒル川の左岸に位置している。そこにはこの都市を飾る多数の華麗な教会や豪奢な邸宅がある。その周囲の属領地域は快適であるに劣らず肥沃である。バリャドリッドは都市ではないが、カトリック王が長年にわたりそこに居所を置いたため、スペインのもっとも繁華な都市群に匹敵する土地となっている。それはフェリペ2世がそこに宮廷を置いたためマドリッドが大いに成長し、また成長し続けているのと軌を一にする。マドリッドに宮廷が置かれたということが、その地の発展にたいそう効果的だったため、そこがさして肥沃な地でもなく、その周辺属領も快適とは言えないにもかかわらず、その地に多数の人間が引き寄せられ、ついにはそれを一寒村から、スペインにおいてももっとも人口繁多な土地へと変貌せしめたのである。

クラクフとヴィリニュスはポーランド人たちにとって、最も多数の人口を擁する都市である[92]。その理由は主に前者がポーランドの諸公たちの、後者がリトアニアの大公たちの座所となったからに他ならない。モスクワ人たちの帝国にあっては、三つの大都会が存在している。即ちウラジミール、大ノヴゴロドそしてモスクワである[93]。これらの都市が大都会なのもまた、それがすべて大領国の大公や元首の座所となっているからに他ならない。今日にあって最も著名なのは言うまでもなくモスクワである。それはこの地にモスクワ大公が居所を置いているからである。それは縦に長々と5マイルにわたって広がっているが、その横幅は大したものではない。またそこにはこの君主の宮廷と邸宅として利用される大城郭が付設されている[94]。そこには多数の人間が住まいしているため、ある人に言わせればモスクワはヨーロッパにおける第一級の規模を誇る四大都市の一つであるとのことである。彼らに言わせればこの四大都市とはモスクワ、コンスタンティノープル、パリそしてリスボンである。シチリアにおいて最も大きな都市は古来よりシラクサであった。この都市はキケロも書き記したように四つ街区に分けられているため[95]、あたかも四つの繁栄した都市によって構成されているようなものである。この都市の繁栄の要因もまた、この地を支配した王や僭主たちがここに住まいしたからに他ならない。だが異教徒どもの侵攻の結果アフリカとの通商が断絶してしまったことにより、王の座所はシラクサよりパレルモに移転されてしまうこととなった。そのためパレルモがこれ以後次第に成長していったのに対して、シラクサはこれと反比例に衰退することとなる。パレルモは今日、イタリア本土の第二級の都市に匹敵するものとなっている。この都市は多くの美麗なる教会や邸宅に飾られるのみならず、古のサラセン人どもが残した建造物の遺跡を有している。だがこの都市について最も着目すべきは、近年に生じた二つの事柄である。一つは即ちその道路である。それは真っすぐな長く広くまた入念に建設された都市を貫通する道路で、これに匹敵するものを私はイタリアの他の如何なる都市においても知ることができない[96]。いま一つは巨額の投資のもとに建設された大防波堤であって、

その効果によりこの都市は極めて利便性の良い港を持つこととなった[97]。それはまことに、古代ローマ人のそれに比すべき豪胆さに裏打ちされた大工事であった。

だが君主の居住が都市の成長にどれほど重大な要因であるかを証明するため、世界の他の地域に目を向けた場合、いったいどのようなことが言えるであろうか。もし教皇聖下がそこに居を定められず、その結果として各国の大使たちや高位聖職者たち、そして諸君主たちがこの地に競って参集することにより、この地が盛大となるということがなければ、ローマは都市というより単なる荒れ地と化してしまったことだろう。聖下の権威とその聖断を求める世界中の数限りない人々が、このローマにやってくるということがなかったのなら。そしてまたこの都を飾り立てる建造物や古代の水道橋、泉水や道路の壮麗さがなかったなら。もし教会の収入の大半が、ローマにおける聖俗の儀礼に用いられる数多の労役に費やされることがなかったなら。そしてまたこうした事業により多数の商人たちや売り子たち、職人たちや労務者たちがその他の、教会に奉仕する者たちがこの地に引き寄せられ、その滞在を享受することがなかったなら。もしそうであるならローマは都市であることから転がり落ち、単なる荒れ地となってしまったに違いない。

【注】

[1] リヴィウス『ローマ建国史』I, 8, 5-6。

[2] この いわゆる「サビニ女の略奪」については、リヴィウス『ローマ建国史』I, 9。

[3] 1526年にジュネーブはサヴォイア公国からの独立を宣言し、1536年には正式にプロテスタント陣営に加盟している。1541年以降名高いジャン・カルヴァンの指導の下、プロテスタント陣営の牙城として、カトリック陣営と鋭い対立のもとに置かれた。

[4] プファルツ・ジンメルン公ヨハン・カジミール(1543-1592)のこと。1583,年から1592年にわたってプファルツ選帝侯の摂政を務めた。ドイツにおけるカルヴァン派諸侯の代表的存在。

[5] ポルト・フェライオはエルバ島北東部に位置する港町。メディチ家のトスカナ大公コジモ1世(1519-1574)は、1548年以降その防衛力を強化するためこの都市を大改造し、自身にちなみコズモーポリ(コジモの都市)の名称を授けた。

[6] 第二代トスカナ大公フランチェスコ1世(1541-1587)。前記コジモ1世の長男。ここではフランチェスコ1世との政策として言及されているが、史上名高いのは彼の弟で、トスカナ大公位を継承したフェルディナンド1世によるリヴォルノ港の自由貿易港化である。

[7] 『ルカ福音書』8章6節。

[8] ボテーロはここで、共和政体を取る都市が君主政体を取る都市と比べ、いっそう容易に発展するという論題を、マキアヴェッリから受け継いでいる。マキアヴェッリのこうした見解については、『ディスコルスィ』I-58等を参照せよ。

[9] アポリナーリ競技は前212年に制定された祭典で、毎年アポロンの礼賛のために施工された(リヴィウス『ローマ建国史』XXV, 12を参照)。

[10] G・ボッテーロ『国家理性論』第6巻第4章。

[11] プリニウス『博物誌』V-14。

12 「仮庵の祭」「過越の祭（ペサハ）」「七週の祭（シャブオット）」がユダヤ教の三大祭礼とされる（『申命記』XVI, 16）。

13 フラヴィウス・ヨセフス『ユダヤ戦記』VI-9-3。

14 北イスラエル王国初代の王。当初イスラエル王ソロモンに仕え重用されたが、のちに不和となりエジプトに逃亡した。ソロモンの死後その子レハブアムに対抗し、イスラエル 12 部族中 10 部族の王に推戴される。

15 『列王記』XII-28。

16 『列王記』XV-29。

17 『詩篇』II-4。

18 『イザヤ書』XIX-11 及び 13-14。

19 オスマン・トルコやカルヴァン派の隆盛を、カトリック信者の信仰心の弱さに対する神の警告として説明している。ボテーロはこうした考え方をすでに、1583 年ミラノにて刊行した『王の叡智について』という著作において表明している。

20 マキアヴェッリとその追従者に対する批判である。

21 『列王記』XV-29。

22ここに記された ロレートからモン・サンミッシェルを経てサンチャゴ・デ・コンポステラに至る地名は、イタリアからフランスを経てスペイン北部ガリシアに至る、いわゆるサンチャゴ巡礼路の諸中継点に他ならない。カルヴァン派への言及は、この経路の途中のフランスにおける同派の存在が、サンチャゴ巡礼の障害となっているとボテーロが見なしていたことを示唆するものである。

23 ここにはボテーロがボロメーオ枢機卿に秘書として仕えた、二年余り(1582-1854)の豊饒・有益な歳月についての、敬虔かつ感動的な追憶が反映されている。

24 『国家理性論』第三巻第一章。

25 ここにはミネルヴァという名の起源を quia minuit nervos（「なぜならそれは筋肉をすり減らしてしまうものだから」）という言葉に求める、空想的語源学が示唆されている。ミネルヴァという名の意味についてのかかる示唆は部分的には、その著『神々の本性について』II, 66 及び III, 62 において、キケロによっても提示されている。

26 ミラノの僭主ガレアッツォ 2 世ヴィスコンティ(1321-1378)のこと。1361 年パヴィあ大学を創設し、翌年ここに記されたような法令を発した。

27 キケロ『トゥスクルム対話』II-25。

28 ヤゲロ朝のポーランド王ジギズムンド 1 世(位 1506-1548)。

29 フェリペ 2 世は 1559 年 11 月 20 日に署名され、1568 年に公布された条例によって、臣下のスペイン人に対して、国外の大学に就学することを禁じた。

30 元来 1588 年の初版においてこの個所では、より詳細な議論が繰り広げられていたが、1589 年『国家理性論』が刊行されるに際してこの当初の節は、同書の第 8 巻第 3 章「勤勉について」として転載され、それ以降の『都市盛衰原因論』の初版においてはここに見るような簡略化された指示が挿入されるにとどまっている。但し 1590 年刊行の本書のローマ版では、1588 年初版に掲載された内容が、保存されたままとなっている。

31 原語は gabelle。

32 原語は gravezze。

33 『デカメロン』序言においてボッカチオにより記述された 1348 年のペスト大流行のこと。

34 カリカットはここではマラバールと称される、インド南西部の海岸地域一帯のことを指している。

35 シラーズは現イランの南西部の都市。ファルース州の州都。古代にはこの地域にアケメネス朝ペルシア帝国の本拠地が置かれた。

36 アラスはフランス北部の都市。パ・ド・カレー県の県庁所在地。

37 以下の記述とほぼ同様の記述は『国家理性論』第四巻第七章に見られる。

38 原語 contado。

39 コーチンはインドのマラバール地方にかつて存在した都市国家。現在はケララ州に属す。1503 年にポルトガルにより植民地化。

40 原語は fuochi（竈）。当時の課税制度上に基本単位であり、奴隷を含む一家族全体を一つにまとめてこのように呼称する。

41 オルティコリはローマから 60 キロ以上離れた、カッシア街道沿いの集落。ナルニの街の手前にあたる。

42 ディオ・カッシウス『ローマ史』36.2.3 及びプルタルコス『ルクルス伝』26.2。

43 本書第二巻第一〇章。

44 ホメロス『イリアス』IX: 381-3。

45 ディオドロス・シクルス『歴史叢書』I-45。

46 『国家理性論』第五巻第七章。

47 1588 年版と 1589 年版においてはこの個所に続いて、「今日この都市はブラッコ、旧カイロ及び新カイロと称される三つの地域に分断されているが、その相互の間はおよそ一マイルばかりも離れている」という一文が付け加えられていた。

48 アリオスト『オルランド狂乱』XV-63。

49 ディオドロス・シクルス『歴史叢書』II-3。

50 『ヨナ書』III-3。

51 ヘロドトス『歴史』I: 178. 2。

52 アリストテレス『政治学』III. I(1276)。

53 アッバース朝第二代教主アブー・ジャアファル・アブドゥッラー・イブン・ムハンマド・アル＝マンスール通称アル・マンスール(位 754-775)のこと。アッバース朝の首都バグダッドの建設者として知られる。

54 パオロ・ジョーヴィオ『同時代史』XXXIII。

55 イラン北西部の都市。13 世紀にイル汗国がここを都として以来、黒羊朝、白羊朝、サファヴィー朝とイラン歴代の王朝の首都となった。

56 文脈から勘案するにここでボテーロの言うタタール人のモンゴル帝国とは即ち、当時アクバル大帝治下最盛期を迎えていた、インドの無カール帝国のことのようである。他方カタイ人のモンゴル帝国とは、本来

の本拠地であるモンゴル高原に残存し、明帝国と対抗関係にあったモンゴル人国家（16 世紀初頭ダヤン・ハーンのもとに再興が果たされた）のことを指すものと考えられる。

57 インドのムガール帝国初代皇帝バーブル(1483-1530)のこと。中央アジアに生まれたが後にアフガニスタンを征服し更に北インドに進出して、のちのムガール帝国の始祖となる。父から中央アジアの覇王チムールの、母方からチンギスカンの血を引いており、ムガールという名もまたモンゴルが訛ったものである。

58 カンベイ王国とは即ちこの地を支配したグジャラート王国(1407-1573)のことと考えられる。カンベイ王国をはじめとするイスラム諸国家の連合艦隊は、アルメイダ率いるポルトガル艦隊と、ディーヴ沖海戦(1509)で敗北し、ディーヴ島にポルトガル商館を設置することを受け入れた。1573 年にムガール帝国のアクバル大帝の攻撃を受けて滅亡した。「カンベイ王国の征服者たるマムードの息子たち」という記述はこのことを指しているようである。カンベイ（今日のカンバート）は同名の湾に面した、今日グジャラートと称される北インドの地域の都市。古来よりインド有数の港湾都市として栄えたが、土砂の堆積によりその港が機能不全に陥ったとこにより、今日はすっかり衰退してしまっている。この都市はマルコ・ポーロやマリン・サヌードなど多くのイタリア人の著書に言及されたが、なかでも重要なのは 1440 年にこの地を実際に訪問したニッコロ・デ・コンティで、彼はこの都市の外周を 12 マイルと記述している。ボテーロのカンベイ王国に関する記述も、これら旅行家の記述によるものと考えられる。

59 チトル（チトルガート）は今日ラジャスタン州に位置する都市。チトルに関する記述は全てマッフェイの『インド史』なかんずくその第 11 巻に基づいている。

60 ムガール皇帝バブールと対立したラージプート同盟の首領であった、メワール王サングラーム・シングの妃ラニ・カルナヴァーティのこと。マッフェイの『インド史』いては、1535 年（36 年ではない）グジャラート朝のバルハドゥール・シャー攻撃に屈したこの王妃のことを、女王（レイーナ）クレメンティナという名（発音の類似によるものであろう）を以て紹介しているが、彼女は 1527 年の夫の死の後、二人の間の子ラタン・シング 2 世とヴィクラマーディティヤ・シングという二人の王の摂政の任にあった。

61 カンバリクは即ち今日の北京。元帝国時代の首府として中国式には大都と呼ばれた都市である。カンバリクの名はマルコ・ポーロ『東方見聞録』に由来する。ただしこの時期の北京は中国人の明帝国の首都となっており、この点ボテーロのアジア認識には少なからぬ混乱がある。

62 スンティエンは杭州、パンチンは北京、アンチンは南京のことである。先にも触れたがボテーロは元帝国の首府であったカンバリクと明帝国の首都であるパンチンが同一の都市であること正しく認識していない。あるいはこのカンバリクと元帝国の上都でカラコルムのことが混同されている可能性もある。後にも触れるがボテーロをはじめ当時のヨーロッパ人の多くが中国のことを、元帝国の伝統を受け継ぎモンゴル人の支配下に置かれるカタイと、明帝国の支配のもと中国人により支配される南部中国（いわゆる中国）という、二つの地域として把握していたため、このような混乱が生じたものと思われる。

63 杭州には 12 世紀中国人の亡命政権である南宋の首府が置かれ、行在ないしは臨安と称された。行在とは皇帝の臨時の座所のことであるが、この中国読みアンザイをマルコ・ポーロがその『東方見聞録』に、訛ってキンザイと記述したことからこの地は西洋において、キンザイの名で知られることとなる。

64 杭州がそのほとりに存在する西湖のことであろう。古来より西湖は中国第一の名勝として名高く、世界遺産にも指定されている。

65 おそらく杭州の地を貫流する銭塘江のことか。

66 杭州はその美観と富裕により古来より、「上に天国あり、下に蘇州・杭州あり（上有天堂、下有蘇杭）」と称えられている。

67 以下の個所においてボテーロは彼自身の中国に対する特別の関心と、この国について近日に提供された幾つか資料に触発されて、長々とした脱線を繰り広げている。　彼が用いることができた中国に関する資料は、旅行者たちからの聞き書きや宣教師たちの書簡、そしてなかんずくゴンザレス・デ・メンドーサ（『大

中国に関する事物や儀礼そして慣習に関する書』1585年）とジョバンニ・ピエロ・マッフェイ（『インド史全十六巻』1588年刊行）の大部の要約本であった。

68 カンタンは即ち今日の広州。古くより南海貿易の中心地として栄え、後に清代に入り解禁政策が実施されると、対外交易の唯一の窓口としてこの地においていわゆる広東貿易が行われた。16世紀末の当時にあってもポルトガル人は、その中国における根拠地マカオとの近接性によって、広州（広東）と盛んに交易を行っていた。

69 スーチョは即ち今日の蘇州。古来より絹織物産業の中心地として富裕であった。

70 ウーチョは即ち今日の漢口。長江中流の物流・交易の中心地として明代より発展。

71 チェンチェオは即ち今日の泉州。唐代以降西方との海上交易の中心地として栄え、元代にはペルシア人やアラブ人の居留区が設置された。『アラビアンナイト』ではシンドバットの居住地とされている。泉州の戸数70000戸とは前述メンドーサ師の著作に基づく数字であろう。

72 マルコ・ポーロもこの泉州を「ザイトン」として『東方見聞録』に書き残した。

73 胃石は反芻動物の消化作用により作り出される物質で、古代中世の薬学においては奇跡的効果を発揮する素材として珍重された。また香料や媚薬として用いられることもあったようである。

74 前出マッフェイ『インド史全十六巻』第六巻。この書の第六巻は中国に関するボテーロの情報の主要な典拠となっている。

75 いうまでもなく茶のことである。

76 大青は青色の染料を産出する植物。

77 本章注37参照。

78 即ち中国古代の神話的帝王である黄帝のこと。ビテイという名は前出メンドーサの書物に由来している。

79 1キンタル＝100 kg。

80 本章注62参照。

81 フランチェスコ・アルヴァレスは、15世紀半ばコインブラに誕生したポルトガル人の聖職者。多年エチオピアに滞在し1527年帰国し、故国にエチオピアについての最初の実証的知識をもたらした。これらの情報一冊の報告書にまとめられたが、ボテーロはこれを1588年ラムシオが刊行した『航海と旅行』掲載の縮約版によって読んだものと考えられる。

82 エチオピア皇帝の称号。正式にはネグス・ナガスト（諸王の王）と称する。

83 プレスター・ジョンは中世西欧の説話に登場する東方のキリスト教的祭司王。16世紀前半ポルトガルの宮廷は、当時のエチオピア皇帝ダヴィド2世を以てこのプレスター・ジョンの末裔と見なしていたが、こうした誤解が生じるにあたっては前記アルヴァレスの報告に基づく処が大であった。

84 トレビゾンドは今日黒海沿岸にあるトルコの都市トラブゾンのこと。13世紀から15世紀にかけてこの地にトレビゾンド帝国が存在し、黒海交易の一大中心地となった。ブルサはトルコ北西部の都市で、1326-1365の時期にオスマン・トルコ帝国の首都が置かれた。

85 黒海ならびにマルモラ海。

86 多島海即ちエーゲ海。

87 これは言うまでもなく古代ローマ市に存した七つの丘に倣ったものである。

88 今日も残るオスマン帝国皇帝の座所トプカピ宮殿のこと。

89 今日のアルジェリア西部の都市トレムセンのこと。ベルベル人系のイスラム国家ザイヤーン朝(1236-1550)の首都が置かれた。

90 フェズはアフリカ北西端に位置するモロッコ王国北部の内陸都市。イドリス朝、マリーン朝、ワッタース朝、アラウィー朝などモロッコ歴代王朝の首都として繁栄した。

91 1591年のナポリの人口はおよそ21万人と見積もられている。

92 ポーランド南部の都市クラクフは歴代のポーランド君主、なかんずくヤゲロ朝のポーランド国王の座所であり、カジェミシュ3世の下ユダヤ人を積極的に受け入れ、地域交易の中心地として繁栄した。ヴィリニュスは歴代のリトアニア大公の居所であったのみならず、今日もリトアニア共和国の首都の地位にある都市。

93 ウラジミールは1108年に創建されたとされるロシアの古都で、ウラジミール大公国の首都として12世紀に最盛期を迎えたが、モンゴルの侵攻により壊滅的打撃を蒙り衰退した。他方ノヴゴロドはその創建を9世紀にまでさかのぼると言われるロシア最古の都市。ノヴゴロド公国の首都であり地中海－黒海－バルト海を結ぶ交易ルートの中心として、ドイツのハンザ同盟とも連携しつつ経済的に大いに繁栄したが、1471年長年のライバルであったモスクワ大公国に敗れ征服されている。

94 モスクワのいわゆるクレムリン宮殿のこと。

95 キケロ『ヴェレス告発』IV, 53。

96 パレルモ最古の街路。1567年に当時のスペインのシチリア副王ガルシア・アルバレス・デ・トレドの計画により拡張整備された。そのため往時はトレド通りと呼ばれたが、今日ではヴィットリオ・エマニュエレ大通りと称されている。

97 同じく副王トレドの命により実現した、パレルモ港の大拡張工事をさす。この工事は1590年まで続行された。